

奈良絵本「ふくろう」

— 國學院大學図書館蔵善本解題Ⅳ —

〔一〕

中昔のことなるに、加賀の国亀割坂の麓に、ふくろうと申す鳥あり、^{（註↓）}

例のごとき語り口でもって書きはじめられる「ふくろう」は、御伽草子の中で異類物と呼ばれている一群の作品の中にあつて、一ツの典型を示す好短篇である。単純な筋ではあるがかなり面白い内容で分量もほどほどの作品を、心斎橋筋の書肆の主人はなぜ採りあげなかったのであろう。

1 奈良絵本「ふくろう」

「ふくろう」には、和歌が十五首もあり、御伽草子独特のいろいろの要素を含んでいる。主たる登場者は、梶・鶯姫・鶯で、まずこの三者のとり合わせを吟味し、書名にされた意味を追究せねばなるまい。この梶が、姉葉の松・山鳥ノ院に於ける月例の管絃の催しの折に鶯姫を見染めたという。この恋もし叶わずはもろともに地獄に堕ちようというほどの執心である。烏の九郎左衛門と鶯の新兵衛とに相談をもちかけると、鶯姫が七つ八つの頃から、「上見ぬ鶯」が思いを懸けてくどき続けてきたが、今に返事がもらえないでいるほどだから、あまりあてにはなるまいが、姫と同じ所で育った山雀の小作に文を託すがよからうと進言する。

徳 江 元 正

梟は長々と文を書きたため、小作に託した後みやまの薬師へ願書^{がんじょ}を奉納する。

鶯姫の宿に着いた小作は、よもやまのはなしの末に、頼まれた玉章^{たまささ}を差し出すが、姫はそれを投げ返す。しかし、小作のふくろうの我を頼みし玉章をいかで空しく返しはつべき

という歌に免じて、姫は返事を書くことにする（上巻）。

鶯姫からの返事を三度戴いて読んではみたものの、梟には文意が全く通じない。もの憂さに木の葉を搔き寄せまどろむや、不慊に思った薬師が文面の謎を解いてつかはすので、翌日の夜、梟は月の出ぬ先に西の阿弥陀堂に赴き、夜中の時分に少しまどろむと、十二単衣姿の鶯姫が乳母^{めのと}の女房を伴って現われ、一首詠む。

思ふとは誰がいつはりのうそぞかし思はねばこそまどろみぞする

目覚めた梟の返歌、

宵は待ち夜中に恨み暁は夢にや見んとまどろみぞする

そこで梟と鶯姫とは寝物語をし、人目を忍んでやってきたからと鶯姫は慌しく帰って行く。別れの歌、

片糸の繰るほどならばとまれかし深き情は寄るにこそあれ（梟）

かりそめに伏見の野辺の草枕露ほども人に知らすな（鶯姫）

諸々の鳥ども——烏・白鷺・四十雀の小兵衛・鶉^{うずら}の九助・鶴の長門守・雀の筑前・蝙蝠^{こうもり}の介・雉子^{きじ}の母衣介・鶏の雅楽介が、それならば我も負けじと鶯姫の方へ腰折れ歌を送る。このことを洩れ聞いた「上見ぬ鶯」は、灰鷹の小六を討手に向けたが、いちはやく梟は木の蔭にかくれてしまったので、鶯姫を害した。梟は歎きに沈み、一旦は腹を切ろうとするが、木菟^{みずう}のきすけが、それよりも鶯姫の亡き跡を弔うがよいと意見するので、梟は思いとどまる。巫^{まじ}を請じて梓にかけてみると、鶯姫は、名残り惜しさが後世の障りとなっていること、弓箭にかかって死んだ故に、昼も夜も六度ずつ十二時の苦しみが訪れることなどの苦患を叙べ、魂は弥陀の浄土へ急ぐ由を告げる。梟は、元結を切って西へ投げ、高野の奥の院で髪を剃り、三熊野をはじめとして諸国を巡り続けたという（下巻）。

——かやうになりはてぬるもたれゆへぞ、露もきえにし鶯姫に、菩提をとほんためなれば、うらみとさらにをものはぬなり。(正)

〔三〕

一読、「ふくろう」が擬古物で、先蹤として悲恋通世譚が存したことは明らかである。舞台を加賀国・亀割坂の麓に設定した理由は、まだなんとも説明できないが、梶・鶯姫・鶯の三者の設定には、作者に意図するところがあつたと考えてよからう。小作から文を受け取った鶯姫は、「我が身はいやしきもの」、「そもじは葛城の山の神のゆかり」と書き記している。この背景にもなんらかの説話が存したものと考えられるが、梶はふくろふとも書き^{〔註2〕}、『本草和名』に「和名布久呂布」とあり、こちらが本らしい。名義に就いては諸説あるが、柳田國男翁が『野鳥雜記』に説くごとく、鳴き声によるものとするのが穩当であろうか。さすれば不孝鳥という異名(『蒙求抄』七・『塵添塩囊鈔』八など)^{〔註3〕}も、伯勞鳥・父母喰鳥とする説も、もとは一つであつたのかもしれない。屋上に來たつて鳴けばその家に禍ありと言われたくらいであるから、いずれにしても耳に快いものではない。狂言「梶山伏」では、人に憑いたりもする。その鳴き声は「ホウくくく」。この梶を、八十三歳とし、老いたくの恋が成就したことにしてあるのは、滑稽味をねらつたものとも受けとられるが、これは、多分、例の志賀寺の上人の説話を踏まえているのであろう。一方、鶯姫は、その異名であり、『和漢三才図会』四三に言うごとく、形うるわしく声艶なるが故に「宇曾姫」とも称したのであろう。ウソは、狂言の山伏物に必ず出てくる

へ貝をも持たぬ山伏が、くく、道々うそを吹かうよ
のうそで、口笛の意。『名語記』に

問 阮籍カフキケル ウソ如何 答 ウソハ嘯也 フクシロノ反 吹代也 笙簞築横笛ナトノナキシロニクチニテフク心ナ
リ 但フソトイフヘキヲウソトイヘル也

次 小鳥ノ名ニウソ如何 コレモクチニテフクウソニカノ鳥ノナク音ノアヒニタレハ フソトイヘル也 同前也 (巻五)

とあり、こちらは梟と正反对で、鳴き声の美しさが特徴となっている。歌謡史の資料としてよく用いられる『たまきはる』にも、「こぜんじの紙、まきあげの筆と、うそに吹きいだしたるを、まこの殿上人末に受けとりて、うたひしをこそ」とあり、『日葡辞書』には、「口笛」と訳されている。その麗しき艶なる声は、この鳥が足を交互にあげて鳴くさまが、琴を弾く人の手つきによく似ていることから、「鶯の琴」という成句もある。

「上見ぬ鶯」があくまでもかげの存在であるのも面白いが、この語は、『義経記』に「上見ぬ鶯のごとくにてあらばや」(巻二)とか「上見ぬ鶯のごとくにておはしたり」(巻七)などに見えており、幸若舞曲「鎌田」にも、「上見ぬ鶯と思ふは如何計ふ」とあり、〈室町コトバ〉の一つとみてよからう。^(註5)

この一篇の興味の中心は、梟がものした懸想文にある。

さて、なに、とりてか、たかまのはらに、よそながら見そめしよりこのかた、なにとやらん、心のうちのみだれがみ、おもひのたねと、なりにけり、

ではじまる玉章は、上巻のおよそ半ばを占める分量である。されば、この短篇の異類物が艶書の文例として引用されるのも故なしとしない。艶書とあれば、当然、そこには恋の謎言葉、大和詞とか懸想文とかいう趣向が盛りこまれるのは、御伽草子の常の行き方である。山雀の小作が文の使者にたつところまで、そっくり、室町時代の雰囲氣を遺し留めている。

当初、梟にはその謎のことが解けなかった。薬師の助力でそれが解けたというのも、まこと〈室町ごろ〉^(註6)にかなった趣向と言えよう。この大和詞には、きちんとした本説がある。一群の「浄瑠璃十二段草子」や「西行の物かたり」が引用する、佐藤憲清と御息所との「及ばぬ恋」の物語を想起せねばなるまい。両者の先後関係を決めることはむづかしいが、今、いちばん身近にある松本隆信氏編『御伽草子』(『新潮日本古典集成』34)所収の「浄瑠璃十二段草紙」から該当部分を引いてみよう。鳥羽の院の後の仰せ、百首の詠歌を献上したのに対し、

心言葉も及ばれず。さりながら、汝にめぐり逢はんことは、今宵過ぎ、また明日をもうち過ぎて、その先の世にならん時、

これより西の方、阿弥陀の浄土にて待つべし

後の御局の仰せ、

いかに憲清承れ。これよりも西の方、弥陀の浄土と候ふは、これより西に当りたる阿弥陀堂の御事なり。后はこのほど百日詣を召されけるが、そも今宵とは夕さり過ぎ、また今宵とは明日の夜を過ぎ、その後の夜、これより西の阿弥陀堂にて会はせ給はんとのおほせなり。憲清。

ところが、厄介なことに、同趣の文が、仮名草子「薄雪物語」にも見えており、こちらの方が、より「ふくろう」に近似の文となっている。『仮名草子集』上（日本古典全書94）所収の「うすゆき物語」上、「おとこ」の六度目の「文」から引いてみよう。

この世にも、またあの世にもかなふまじ。三世すぎて、天に花さき地に実なりて、そののち西方弥陀の浄土にて来迎を待て。鳥羽の院の後の教え給うには、

この世とは今宵の事、あの世とは明日の夜の事、三世過ぎてとは、三日の夜過ぎて、四日の夜といふことなり。天に花さきてとは、星いづる事、地に実のなるとは、露落ちてといふ心なり。西方弥陀の浄土とは、これより西の方に立ち給ふ阿弥陀堂にての事なり。

「天に花咲き、地に実成り」が、「ふくろう」と「薄雪物語」とに共通している。問題はそれのみにとどまらず、阿弥陀堂での最も高貴なる女性と「東の夷」（浄瑠璃十二段草紙）・「下人」（薄雪物語）の憲清とのやりとりの歌も、「ふくろう」と「薄雪物語」とは符合する。

おもふとはたかいつはりのうそそかしおもはねはこそまどろみそする

よひはまちよなかはうらみあかつきはゆめにや見んとまどろみそする（ふくろう）

われならば鶏なくまでも待べきに思はねばこそ君はまどろめ

宵は待ち夜中はうらみあかつきは夢にやみんとまどろみぞする（薄雪物語）

かの天竺の術婆伽のはなしを想い起こさせるこの条は、^{（註）}「ふくろう」の成立に関して少からぬ示唆を与えてくれるのではなからう

か。「薄雪物語」との字句の面での共通性をいうなら、まだ例は他にもある。

梟は、久しく想ひを懸けていた鶯姫の美しさに及ぶものなしとして、古今東西著名な「ゆうちよ（優女）」を列挙している。

衣通姫、皆鶴御前、小野小町、吉祥天女、松浦姫、紫式部、小式部、和泉式部、小督局、大織冠の乙姫、揚貴妃、源氏六十帖の女房たち

これに数倍する四十八名の「美人」が、仮名草子「恨の介」の冒頭、^{〔註8〕}「物によくなくたとふれば」以下に見られるが、「衣通姫」と「皆鶴」のほかは、すべて含まれている。皆鶴は、書かれたものなら、まず幸若舞曲「みなつる」及びこれを絵冊子に仕立て直した奈良絵本「みなつる」以外には出てこない姫御前の名で、これが奈良絵本の「ふくろう」「ふくろふ」に採りあげられているのは、充分注目してよからう。

「ふくろう」の主な趣向は、あらかた先行の御伽草子にまなんだものと言えよう。文の使者まで登場させているのは、恋物語の本道をゆくもので、その懸想文にいたっては、古いもので「十二段草子」、ほぼ同時代の作例として、「皆鶴」・「小男のさうし」・「横笛草子」・「西行」それに説経「をぐり」など、「ふくろう」との先後関係を論ずることは簡単なことではない。思えば、志賀寺の上人と京極の御息所との物語も、ずいぶんと久しい伝統を有していたことがわかる。

「上見ぬ鷺」は、典型的な〈室町コトバ〉の一つであらう。『諺苑』（春風館本、「古辞書叢刊」第二）に「上^{ウヘ}ミヌ鷺^{ワシ}ノ振舞^{フルマヒ}」と見え、「新題林釋教輝光 常^トトハニテラテヤニホフ鷺^{ワシ}ノ山ウヘミヌ法ノ花ノ色香ハ」と註を加えている。『たとへづくし』（龍谷大学図書館蔵）に「上^{ウヘ}不^レ見鷺^{ミワシ}」とある。また、「ふくろう」の作者には、謡曲の嗜みがあったものと考えられる。或は、寛永ごろという背景を考慮に入れてみるならば、その座右に謡本または謡曲詞章を絵巻や絵冊子に仕立てたものが具わっていたとも思われる。例えば、「花に三春の約あり」^{〔註13〕}とか「壁に耳」^{〔註14〕}は『諺苑』にも出ているが、後者は「壁に耳、岩のもの言ふ世」と用いられているのは、謡曲の「小鍛冶」から借用したに違いない。また、「いやましの思ひ草」などの佳句も、謡曲「松風」^{〔註15〕}を知悉していなければ、口にも筆にもあがってこない詞句である。

〔三〕

昭和五十八年に刊行された『御伽草子の世界』（三省堂）は、御伽草子の国際会議の成果の一ツであり、^{〔註9〕}これには松本隆信氏篇の画期的な「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」が収めてある。これによって、「ふくろう」別名うそひめ物語・鳥物語」の項を検出すると、七本挙げてあり、最後の項目には

※国学院大・奈良絵本 横本二冊

と見えている。※印は、未調査を示し、奈良絵本の横本といえ、江戸に入ってから御伽草子はもっぱらこのかたちで流布したものである。^{〔註10〕}

一群の「ふくろう」の中で、いち早く翻刻されたものは、京都大学付属図書館蔵の、寛永比刊絵入大本（一冊）である。有朋堂文庫などにより、広く識られているが、いまもって孤本である。恐らく、現存最古のテキストであろう。次に、近年絵の部分のみカラー図版で余すところなく公刊された、松本隆信氏蔵の奈良絵本（一冊）「ふくろう」で、これは『室町時代物語大成』第十一に翻刻されている。翻刻されたものでは、このほかに「ふくろうのそうし」（東京大学国文学研究室蔵、明暦四年写本・一冊）と「うそひめ」（静嘉堂文庫蔵、絵入写本・一冊）とがある。今、好個の比較の材料として、二種の奈良絵本を採りあげ、どの程度のことまで言い得るものか、試論を展開してみたい。

まず、國學院大學図書館蔵本「ふくろう」の書誌に就き、簡潔に記す。

「ふくろう」奈良絵本・二冊 縦凡一五・八糎 横凡二二・九糎 紺紙金泥模様の表紙、上冊に梅の木など、下冊は浦辺の景などを画く。題簽（一二・一糎×三・二糎）朱色、金泥・砂子を撒き、「ふくろう 上（下）」と本文一筆にて墨書、表紙中央上部に貼布。見返 銀箔唐草空押文様、一面十三行、料紙間似合紙 本文上卷十三丁、下卷十四丁、絵は本文よりやや厚手の同質の料紙を用いている。

絵 上巻(二オ) (裏面に「ふくろう上」と墨書) (四ウ) (同「二」と墨書) (十ウ) (同「三」と墨書) (十二オ) (同「四」と墨書) 計四図

下巻(四ウ) (「ふくろう下」と墨書) (七オ) (同「六」と墨書) (九ウ・十オ) (同「七・八」と墨書) (十二ウ) (同「九」と墨書) 計四図、うち一図は見開き

絵はいずれも上部・下部をすや、霞で区切り、上部の霞の下部に銀箔の雲型を押してある。絵の裏面の走り書きの数字は、物語の展開に従った順序を示すものであるが、あるいは、上巻の方にあとさきの間違いがあるかもしれない。勿論、絵の料紙と本文詞章の料紙とは別紙で、ヤマのところでは貼り合わせてある。

この「ふくろう」は、縦横の寸法といい、表紙の装幀といい、画風といい、また一面の行数といい、横本の奈良絵本の最も典型的な、かたちを示すもので、私が謂うところのB型奈良絵本である。

一方、「ふくろう」の解題を読むと、私の謂うA型の奈良絵本であることが直ちに理解できる。即ち、

紺色無地表紙、朱色の題簽に「ふくろう 上(下)」 各巻十丁、一面十五行書き、本の寸法、縦一七・七厘、横二五・二厘 料

紙鳥の子紙 絵 上巻五図 下巻十図

いわゆる横本よりも一まわり大きいかたちで、料紙もやや上等の鳥の子を用い、一面の行数も十三行より多くまゝ濁点を付し、これは典型的な古い方のかたち、の奈良絵本である。このB型本とA型本の奈良絵本の比較は、私も、「こわたきつね」(A本・岡見家本、B本・実践女子大学図書館蔵本・架蔵本) 論のかた幾たびか回を重ねて言及してきたが、A型本とB型本との関係は、並列する兄弟関係ではなくて、親子関係として把えてみることできよう。B本は、渋川版二十三篇の材料源となったであろうと、かつて推測してみたことがある。ただし、残念なことに、渋川版↓横本B本↓横本A本に当て嵌る同一の作品例が、現存諸本にあつてうまい具合に見出だせないのである。

御伽草子研究の現段階にあつては、A型奈良絵本の一つの前のかたちとして、「小絵」というものを想定している。「小絵」の具体例は、ほぼ梅津次郎氏『絵巻物叢誌』(昭47)・『絵巻物残欠の譜』(昭45)^(註1)に収められているが、それに加えるものがあるに

しても、皆で十五点は越えまい。近時「木幡狐」の古絵巻が欧州のヴァチカンから発見され、その大要も紹介されたが、これは「小絵」ではないようである。一群の「ふくろうふ」は、渋川版の仲間には入れてもらえなかったものの、「ふくろうふ」以前には、異類物の小型の絵巻が一ツならず存するのは、^(註12)なにかにつけて示唆するところがある。

『室町時代物語大成』第十一の解題には、「ふくろうふ」下巻の絵はすべて十図とあるが、この数は、実は正確なものではない。より正確には、十面というべきで、そして、第七図から第十一図までの五面は、一続きの画面と見られるものである。幸なことに、『太陽』古典と絵巻シリーズⅢ「お伽草子」(昭54)「ふくろうふ」の画面が殆ど掲載されている。A型の奈良絵本が、五面を費して、同じ主題——鳥類がおのおのの名前や属性を詠みこんだ秀句尽しの和歌の列举——を繰り展げているという一事を似てしても、それ以前に「縦五・六寸ばかりの小絵巻」(『絵巻物叢誌』所収、「瓜子姫絵巻」)が存在したであろうことを、十分に推測させるのではなからうか。B型の奈良絵本「ふくろう」にあっても、同じ場面(下巻の見開きの画面、九ウ・十オ)は絵だけで、絵詞風に和歌が書き添えてないのはなんとも惜しいが、これとて、小型絵巻——「小絵」の名残りともみられぬこともあるまい。

まずは、詞章と画面との比較を、試してみよう。上段が「ふくろうふ」(A型奈良絵本)、下段が「ふくろう」(B型奈良絵本)、「頁」以下「段」・「行」は、『室町時代物語大成』第十一に則る。前回の対校表の踏襲である。本文詞章の異同に止らず、漢字表記の相違(「川」と「河」など)や仮名遣いの違い(「いは(岩)」と「いわ」など)をも採りあげてみた。

〔四〕

頁 段 行		3 5 3 下		3 5 4 上	
		2	3	5	7
松本隆信氏蔵本（上）		ふくろふ	うちう	きはめす	おもひたち
				九らうさゑもん	しんひやうゑ
				ありしときうそひめの	ひき給ひし
				を一め見しより此のかた	
國學院大學図書館蔵本（上）		ふくろふ	雨中	きわめす	ナシ
				九らさへもん	新ひやうへ
				の在しときこそひめの	ひき給ふ
				ナシ	
				となりまさり	たまつさ
				とつけて	給ひくれと
				九らさへもん	しんひやうへ
				いふやうは	おほせにて
				御返事は	御返事もなき
				うけたまはり候	

11 奈良絵本「ふくろう」

3 5 5 上				下															
11	10	8	1	14	12	10	9	7	6	3	2	1	16	15	14	13	10	9	
あまをふね 見るやたひねの なかりけれ ことばなり				いかにてか返事の あるへき そたちたまひ 返事は あるべきやらんと ふくろふ けにもとや おもひけん ちかころ 山とりのゐん くわんけんの ひき給ひし 一め見しよりも をくり 文をつたへて 申やう 御なひきなき いたはしく候あひた 一わうの ふくろふ なに、よりてか たかまのはら															
あま小ふね 見るたひねの なかりけり ことはなし				いかて御返事の あるへきそ 御そたち候へは 御返事 あるへきと ふくろふ けにもと おもひ ナシ 山とりの院 くわけんの ひき給ふ 一め見しより 送り 文つたへて 申けるやうは 御なひきもなき いたはしく候ま、 ナシ ふくろふ なに、とりてか たかまのはらに															

上													下												
18	17	16	15	14	12	8	6	1	18	17	15	14	10	9	6	5	2	17	16	15	12				
うへ見ぬ御かたへ きみもし にてこそ申へけれ をひめくり あるかんととき てんしやうの おんねん こんしやうにての その中に のにふし もらさて									たとふれは わかつてう にんけん ちくるい 大はんにやは うつゝらか八万さい うらしまか たとふれは そとをりひめ みなつる御せんか けんそうくはうていの きさきの中に 女はうたち そのほか うたにも																
うへ見ぬわしさまへ ナシ にて申へし をいめくり ありかんととき この をんねん こんせうにての その中にも 袖にふし からさて									たとうれは わかちやう ナシ ちくるいも 大はんにやきやうは ナシ うらしま太らか たとうれは そとおりひめ みなつるか けんそうくわうていの その中に にうはうたち このほか うたにもよまれたる																

13 奈良絵本「ふくろう」

3 5 7 下										3 5 7 上																				下	
2	1	16	15	10	8	5	4	3	2	1	18	15	12	11	7	6	3	2													
と、き るりくはうによらいわかたまつさのうそひめさまへ										一夜の かつらおのこ あまやとりもたしやうのきゑんとき、ぬれと わか心かわれにしたかは、 あはれみ 給ふなり ふてにもいかてつきすまし　さすかことをもいはし ろの まつことのはも ふつしん 申たてまつる くはんしよをそした、めける										てにてを あひたに しやうめつめつるの つるに 見えもせず まこと 身をやつしつ、 わかむねよりや みづにもまる、											
まことにとつき ひめへ るりくわう如来かのうそひめのわかたまつさのうそ										ひとよ かつらおとこ あまやとりもたしやうのえんとうけ給はる　一かの なかれをくむこともたしやうのゑんとき、ぬれは ナシ あはれに おほすらん ナシ まつことはりも ふつちん 申ける くわんしよをした、めてこめける										てを あいたに しやうめつめつの ついに 見へもせず まことの 身をやつれそひ むねよりや みつにうもる、											

														3 5 8 上														
14	12	9	8	7	3	2	17	14	13	12	11	10	9	5	4													
うちをきかたふ						とりあへす ふくろふ いかてむなしく まことにそもし 御かたよりも 御ことの つるに かきにける	御返事 かのやくしの しやこのたるき きせい申ける さるあひた 山からは うそひめのやと 物かたりをはしめ しさいにあらす ふもとにて ふくろふ うそひめさまを 見そめたまひしより こひとなり たまつさを									御返事を やくしの ナシ きせい申さむ ナシ 山からこそ かのやと 物かたりはしめつゝ しさいてさらになし ふもとに ふくろふ そもし殿を ナシ こひにして かの御ふみを												
うちをきかたふ						とりあへす一しゆのうたをよまれたり ふくろふ むなしくいかて いまことに 御かたより 御ことの ナシ あそはしける	さるほとにうそひめの御返しに																					
國學院大學図書館蔵本（下）																												

15 奈良絵本「ふくろう」

上						下											
12	7	6	5	4	2	16	14	13	12	11	9	7	3	1	17	16	
<p>3 5 9</p> <p>さとらぬ事 こよひすきてのこよひとはあすのよの事 月ほし あかくなき事 あみただうの まかりつゝ じぶんに</p>						<p>御ふみのうち ことかりそめの わか身の事は いやしきもの そもしさまは おもひまいらせさふらふ こん世の てんに わたしけり 山返事うけとり ふくろうにわたしければ 三といたゝき ひらひて きよくなるふせい かへりけり ふくろふ あまりのことの</p>											
<p>松本隆信氏蔵本（下）</p>						<p>ふみの中 ことはりそめの わか身は いやしきものにて候へは そもしは おもひまいらせ候 こんやの てんには 山からにわたしけり 山からなのめならすに思ひつゝいそき ふくろうとのにそたてまつりける ふくろう ナシ ひらいて きよくなるふせい かへりける ふくろう あまりにことの</p>											
<p>さとらん事 こんよすきてまたこんよとはあすのよの事也 ほし あかくなき事なり あみたとうの まちにける ちふんに</p>																	

3 6 0													下						
上													13	11	10	6	4	3	1
2	1	17	15	14	12	11	10	7	6	5	4	2							
下													上						
をくりまいらんとて													めのと女のう						
此よし													けをこし						
ふしみののへに													うたをよむ						
よみすて													ましろみはすれ						
此よし													とよみければはもしなから						
をくりまいらんとて													御物かたりし						
此よし													うそひめはふくろうのそはへうちより給へはそのと						
をくりまいらんとて													き						
をくりまいらんとて													うれしき中にもあきれさう／＼としてありければ何						
をくりまいらんとて													とやかとや						
をくりまいらんとて													このほとの						
をくりまいらんとて													か、み山に						
をくりまいらんとて													うれしさに						
をくりまいらんとて													おとし						
をくりまいらんとて													おとにき、し						
をくりまいらんとて													しらさりし						
をくりまいらんとて													人めを						
をくりまいらんとて													せんとき						
をくりまいらんとて													よみ侍りける						
をくりまいらんとて													ふかきなさけに						
をくりまいらんとて													またこそひめの御返事に						
をくりまいらんとて													ふしみののへの						
をくりまいらんとて													よみすて、						
をくりまいらんとて													此よしを						
をくりまいらんとて													送りまいらんと						
をくりまいらんとて													めのとのにうはう						
をくりまいらんとて													けおこし						
をくりまいらんとて													うたをよまれたり						
をくりまいらんとて													ましろみそする						
をくりまいらんとて													とよみければうそひめ此うたをきこしめしてうちと						
をくりまいらんとて													けかほにて						
をくりまいらんとて													御物かたりいたし						
をくりまいらんとて													ひよくれんりのちきりをそこめければ						
をくりまいらんとて													あまりのうれしさに中にもかやうに						

17 奈良絵本「ふくろう」

														3 6 1							
														上							
14	12	11	10	9	8	6	5	2	1	13	10	7	5	4	1	13	10	7	4	11	3
下																					
ふくろふ														うたをそよみける							
まつうそひめを														あはさるこひに身をやつすかな							
ふくろふ														からすの九郎さへもん							
なけきしつみけるは														しらさきのしんひやうゑ							
ふくろふせめて														四十からのこひやうゑ							
ふくろふの一そく														うつらの九すけ							
申けるやうは																					
はらをきり給ふとも																					
かえらせ給ふへきみちもあらず																					
なき御あとを																					
とふらひ給へと																					
ふくろふ																					

																3 6 2	上
																	1
																2	1

363 上 1		18	ほたひ うらみとは
なかりけりく		ほたい うらみと	をもはぬなり

〔五〕

次に絵に就いて比較を試みてみよう。上段にA型の「ふくろふ」、下段にB型の「ふくろう」を記す。

<p>〔第一図〕 梟ノ屋形。屏風ノ前ニ梟、白鷺ト鳥ト談合スルトコロ。上部・下部トモニすやり霞、上部ハ空色、下部ハ白色カ。</p> <p>〔第二図〕 梟、山雀ノ許ヲ尋ネ、文ヲシタタメルトコロ。山中ノ景。</p> <p>〔第三図〕 山雀、鶯姫ノ許ヲ訪イ、文ヲ渡ストコロ。(屏風ノ前ニ鶯姫、几帳ノ一部ガ見エルホカハ、第一図ノ梟ノ屋形ノ人物配置ト全ク同シ構図)</p> <p>〔第四図〕 山中、谷川ノホトリ。寝ソベツテイル梟。</p> <p>〔第五図〕 阿弥陀堂。睡眠中ノ梟ヲ見テ立チカエラントスル鶯姫。縁ノ下端ニ、頭上ニモノヲ戴ク鶯姫ノ侍女。(以上、上巻)</p>	<p>〔第一図〕 梟ノ屋形ノ一間。梟、鳥ト黒イ鳥ト面談ノトコロ、上部・下部トモニすやり霞、上部ノ霞ニ、銀箔ノ雲型ヲ置ク。(二オ)</p> <p>〔第二図〕 梟ノ屋型ノ一間。梟、山雀ニ文ヲ託ストコロ。(四ウ)</p> <p>〔第三図〕 山雀、鶯姫ヨリノ文ヲ梟ニモタラストコロ。(十ウ)</p> <p>〔第四図〕 梟、みやまの薬師ヘ願書ヲ奉ルトコロ。紅葉ノ景。(十二オ) (以上、上巻)</p>
---	---

〔第六図〕阿弥陀堂。眼ヲ覚マシタ梟ガ鸛姫ノ訪レニ氣ツクトコロ。荷ヲ下シタ侍女、階ニ腰ヲカケテイル。

〔第七図〕鳥ト白鷺。(以下、画詞風ニ、腰折レ歌ガ書き散ラサレテイル。鳥ドモハ衣装ヲ著ケテイナイ)

〔第八図〕四十雀ト鶉。

〔第九図〕鶴ト雀。

〔第十一図〕鶏。(八・九ト十・十一トハ、見開キニナツテイル。モトハ一続キノモノデアッタロウ)

〔第十二図〕山ト水ノ流レ。雲ノ向コウニ遠山。前ニ樹々。

〔第十三図〕山中。谷川ノホトリ。寝ソベツテイル梟。(上巻ノ第四図ト同シ構図。『太陽』ノ解説ニ、「間に合わせ」トアリ)

〔第十四図〕山中。谷川ノホトリノ庵室ヲ見オロス景。屋内ニ梟、僧衣ヲマトイ、仏前ニ鉦鼓ヲ打チ続ケル態。

〔第五図〕阿弥陀堂。几帳ノ前ニ、梟ト十二單衣姿ノ鸛姫。

傍ニ姫付キノ女房。(但シ、堂ノツクリデハナク、梟ノ屋形ニ画ク)(四ウ)

〔第六図〕椿ノ木ノ下ニ、白鷺・鳥ナド四羽ノ鳥ドモ。(衣装ヲ著ケテイナイ)(七オ)

〔第七図〕梟ノ屋形。婚札ノ場。梟・鸛姫、姫ノ女房二人、鳥・獸ナド大勢。野外。(九ウ・十オ)

〔第八図〕山中庵室ノ態。一心不乱ニ念仏ヲ唱エル梟。同行ノ僧形ノ鳥ドモ、同シク仏前ニ坐ス。庭前紅葉。(十二ウ)

「ふくろふ」が屋外に紅葉をあしらっているのに対し、「ふくろふ」には桜花爛漫の景が多く、人物もこちらの方が大ぶりである。「ふくろふ」の画面の数は、『室町時代物語大成』の解説では全十五図となっているが、『太陽』の図版では全十四図と数えている。

本文の対校表を見て、幾つかのことが指摘できよう。まず、「梟」の仮名表記である。「ふくろふ」(國學院大學図書館蔵本、奈良絵本B型本)の方は、本文中も題簽と同じ表記で通しているが、「ふくろふ」(松本隆信氏蔵本、奈良絵本A型本)の方は、本

文中にあつては必ずしも同一表記で通してなく、半々である（「ふくろふ」「ふくろう」とも各十一例）。

次に上巻・下巻の分け方は、B型本では、鶯姫が山雀を信じて返事を書きはじめるところ、

—— ことかりそめのみつくきもいかてはかなくもらすへしとて御返事をそあそはしける さるほとにうそひめの御返しに
（十三ウ）

で上巻は終り、下巻は懸想文の

—— あからさまなる御ことのはまことにみつきのあとうちをきかたく（B本）

から始まっている。A型本では、その鶯姫からの返事を読んだ梟がまどろむところで上巻は終り、

—— さるほとにふくろふ、あまりのことの、ものうさに、木のはかきよせ、まくらとし、まどろむところに、ゆめをそ見
たりける

下巻は

—— われは、山の、やくしなり、さても、うそひめの、かたより、よき返事にて候を、（A本）

と薬師如来の夢想の条から始まっている。

次に、詞章の順序について、見てみよう。諸鳥の囀りは、前者では、烏・白鷺・四十雀・鶉・鶴・雀・蝙蝠・雉子・鶏となつてゐるが、後者では、蝙蝠と雉子とが入れ替つてゐる。なお、後者では、いちいち丁寧に、和歌の近くに、詠んだ鳥の名が書き込まれているが、前者にあつては省略されている（360・下・4）。

次に、甚しい異文について見てみると、梟の玉章の中で、「一河の流れを汲む」の有名な成句が、目移りの故か、A本にあつては脱けている（357・上・3）。逆に、梟の玉章の結び近く、「こけのたもとくちぬべし」に続く「ふてにも、いかて、つきすまし、さすか、ことをも、いはしろの」がB本にあつては脱けている（357・上・8）。また、阿弥陀堂での「物語」のところで、「ひよくれんりのちきりをそこめければ」（359・下・11）が後者では脱けているが、あつた方が文意はよりよく通じよう。

主だったところは、右の二・三ヶ処のみで、他は、特に読解に支障をきたすような違いではない。ただ、全般的に言えることは、後者の奈良絵本A本の方が、文辞が整っていて丁寧であることは否みがたい。このことは、他の奈良絵本A型本・B型本の比較に際しても、ほぼ同様のことを言い得るのではなからうか。「ふくろう」「ふくろふ」が、共通の祖本を有していることの証拠に、殆んど本文に相違がないこと以外、極端な例を一ツ挙げてみるならば、山の薬師がやまとことばの謎ときをするところ、A本・B本とも「ほのかに、あかくなき事」という句があり、「ふくろふ」下の翻刻では、のところに(マ、)印を付しているが、これは明らかに「あかくなる事」の誤写であろう。A本・B本ともこのように書いてあるのは偶然ではなく、B本がA本に倣ったか、ともに祖本に忠実に書写したかのいずれかであつたろう。当然、原本には「あかくなる事」と書かれていた筈である。

(未完)

(國學院大學文学部教授)

註1 本文詞章・語句の引用は、國學院大學図書館蔵、奈良絵本「ふくろう」に拠る。平仮名を漢字に直した部分もある。

2 「色葉字類抄」は、フクロフ・フクロウの双方を掲げる。

3 「塵添塩囊鈔」巻八・伯努鳥事。

4 志賀寺ノ上人と京極御息所との説話は、『俊頼髓脳』をはじめ諸書に見えるが、仮名草子「薄雪物語」上には、「志賀寺の上人は、八十三の歳京極の御息所を恋奉りて、大内山にたたずみ給ふ」(日本古典全書94)とある。

5 岡見正雄氏校注『義経記』(日本古典文学大系37)三六〇ページ頭註一五。幸若舞曲「百合若大臣」「十番斬」にも用例あり。

6 「西行の物かたり」(「室町時代物語大成」第五所収、高山市歡喜寺蔵、写本一冊)は江戸初期の写、「仮託の説話が多く、御伽草子風の内容」(同書解題)で、この系統の伝本として、元和四年写、筑土鈴寛氏旧蔵本「西行」(『西行全集』所収)があるのみ。「西行の物かたり」のやま場は、志賀寺ノ上人と京極ノ御息所の物語と、西行が昔住み馴れた鳥羽の館を訪れ姫君と親子の名告りをする条であるが、前者には女院の返事、そらさやの侍従による謎解き、女院は「いつも、月の十五

日に、西のあみだ堂へ、御参詣あり」とあって、その年の八月から翌年の如月まで、乗清は「仏殿の御格子」から女院の姿をかいま見ることになっており、二人の逢瀬は、女院が短冊に「あこぎ」と一筆書いたことで終り、伊勢の三わたりのほとりで童からあこぎの謎解きを示されるという筋になっている。「薄雪物語」の展開と、このあたり軌を一にする。

7 術婆伽の説話に関しては、西村聰氏「百夜通い説話考」（『國學院雜誌』八十六卷八号）が詳細を極める。

8 日本古典全集94『仮名草子集』上（野田壽雄氏校註）所収。

9 昭和五十三年・五十四年に、ロンドン・ダブリン・ニューヨークまた東京・京都に於いて、〈奈良絵本国際研究會議〉を標榜する国際會議が開かれた。その成果の一ツとして『御伽草子の世界』と『在外奈良絵本』（昭56・角川書店）とが刊行されている。

10 一口に奈良絵本と謂うが、本文流伝の上からもまた奈良絵の画風のうつりかわりの上からも、それらのかたちの相違による整理が必要であろうと考え、『國語と國文學』（平2・5、昭和の国語学・国文学特集）に、「文学と美術——中世文学史と奈良絵本——」なる一文を草した。

11 梅津次郎氏は、これらの著作に於いて「硯割絵巻」「瓜子姫絵巻」などの「小絵」を紹介・翻刻を試みられた。

12 例えば、「雀の発心」・「鳥獸戯歌合物語」・「鳥物語」など。

13 『謡言粗志——翻刻と校異——』上の「鞍馬天狗」「花に三春の約あり」の項に、「旧抄曰事文類聚ニ云」として、齊の国の男女と牡丹草とにまつわる説話を引く。

14 同書「小鍛冶」の項「壁に耳岩の物いふ世の中に」を註して、『詩経』・『管子』・『博聞録』を引く。

15 謡曲「松風村雨」の古奈良絵巻が管見によれば二ツは存する。一ツは鴻山文庫蔵本、——これは再度東京に於ける展覧会で偶目したことがある——一ツはニューヨーク市立図書館蔵本、これは、『在外奈良絵本』により、その全貌を知ることができる。